

『シルヴィアの恋人たち』における ゴシックと反ゴシック

鈴 江 璋 子

1. はじめに

近代市民社会は共同体の良識と道徳律によってゴシック的要素を抑えこんだ社会である。しかし一見荘重で揺るぎなく天を指しているかに見えるゴシックの塔が「思いがけないほど複雑で危険性と二重の意味に溢れ、信仰と懐疑を育む世界」であり、「石積みの一つ一つが危険を孕んでいる」(サイファー 50)ように、全体として平穏で、変化のない日常の繰り返しに見える普通の市民の生活も、実は個々の人間の苦悩の叫び、爆発しそうな怒りや悲しみを抑え込んだ、微妙な均衡を保ったための緊張に満ちた社会なのである。『シルヴィアの恋人たち』において、ギヤスケルは登場人物一人一人の情念の噴出と抑制、そのために起こる緊張を描き出す。社会の重圧が、小さな石組みには支えきれないほどに暗くのしかかるとき、小さな石は砕け散る。『シルヴィアの恋人たち』を構想するにあたって、ギヤスケルは時代を執筆時の50年前の、英仏戦争による緊張の時代にとり、舞台を北海に面した捕鯨港という異界 海と陸、生と死の境界であると同時に英国とフランスを隔てつつ繋ぐ場所 に置いて、個人の願望と国家の要請との軋轢という主題を際立たせている。組織の網の目が張り巡らされ、個の理念と普遍の合意の間の緊張を見据えねばならない今日、『シルヴィアの恋人たち』によって提起される問題は決して古びていない。ギヤスケルは鋭く問題を指摘しながらも時事評論に傾くのを避け、小説家らしく、問題を個人の領域へと収斂させる。ギヤスケルは作品の構造をゴシックに組みながら、それがゴシック小説として立ち上がるのを、個人の良識や宗教的道徳心、憤みなどの反ゴシックの要素によって抑え、一般読者に受け入れられやすいロマンスの枠内に収めているのである。海軍の強制徴兵に怒り、市民としての正義感を爆発させて、ついに処刑されるに至るダニエル・ロブソン、夫が逮捕され処刑されたために錯乱した妻ベル・ロブ

ソン、恋心を抑えてフィリップに尽くすヘスタ・ローズ、妻子を思いながら、罪の意識のために家に帰れない自己追放者フィリップなど、ゴシック的情念のマグマは登場人物の間にたぎっているが、人物それぞれの持つ善良さ、誠実さ、意思の強さが、物語をヒューマンな歴史ロマンスの範疇に納める。本論は『シルヴィアの恋人たち』において、ゴシック的世界が反ゴシックの要素によって抑制され、ノーマルな市民社会の深層に潜められていく様を考察するものである。

2. 職場の才女：屋根裏の狂女

ヒロインのシルヴィアが心ならずも新妻として導き入れられる「古城」とは、港町モンクスヘイヴンの老舗フォスター洋品店である。夫のフィリップ・ヘップバーンはこの店の店員で、やがては店を継ぐだろうと、周囲から囑望されている。彼は従妹シルヴィアがまだ幼いころからその美貌と活力、率直な感じやすさなどに惹かれ、ゆくゆくは妻に、と思い定めてきた。彼の一途な思いは彼女に伝わらず、付きまとって細かく指示する態度を鬱陶しがられてきたのだが、シルヴィアの身边に異変があり、彼女がひたむきに愛し、結婚を誓った恋人のチャールズ・キンレイドが海難事故で死亡したらしいと断定されたこと、父ダニエル・ロブソンが海軍強制徴兵反対蜂起の首謀者として処刑されたこと、そのショックで母が精神を病むにいたったこと、そのため農園を維持できず、生計を立てる手段特に母を養う手段を失ったことなどの理由で、ついに彼女は喪服を着た花嫁としてこの家に入ったのだった。

シルヴィアは気づかず、フィリップも気づかなかったのだが、この家は決して二人が新婚生活を始めるに適した場ではなかった。店は町の広場に面した繁華街の一等地にあり、たたずまいには風格があり、店舗裏には広間、台所など、便利な居住空間が付属していた。ここに手を入れ、新夫婦の住居にするのは、誰の目にも名案に見えた。だが、実はその家はさまざまな報われない恋の恨みの糸が縦横に織りなされている場だったのである。まず店の所有者ジョン・フォスターは若いころ美しく快活な娘だったアリスに恋し、恋が叶わなかった後もひそかにアリス母娘に気配りをしている。フィリップの同僚であり、ライヴァルでもある若者ウィリアム・クルソンはアリスの娘ヘスタに恋をしているが、見向きもされない。そのヘスタは真面目で信心深く、恋愛感情など持たないと周囲に思われてい

るが、実はひそかに深く、フィリップを愛しているのだ。優しく思いやりがあるが地味な性格のヘスタは、読み書きも計算も堪能で、接客、商品管理にも有能な女店員として、フィリップも深く信頼している。ただ恋愛感情は持つことができなかった。まして、ヘスタに想われているなどは夢にも考えなかった。この間の事情は母親アリスには手に取るように分かっており、シルヴィアへの厳しい態度として現れるのである。

職場と住居が連結しているこの家の構造では、夫婦のプライバシーは保ち難い。長年この店に勤務してきたヘスタには、職場という、自分とフィリップが育ててきた親密な空間にシルヴィアに土足で踏み込まれたという、いわば後妻に対して先妻が抱くような恨みがないわけでは決してない。職場の才女ヘスタはすなわち「屋根裏の狂女」でもあるのだ。ロチェスターの館の屋根裏に狂女バーサを発見するジェイン・エアのように、また前任者の亡霊が子供たちを惑わすのを見る *Turn of the Screw* の新任の女家庭教師のように、また先妻レベッカの遺品の群に窒息しそうになるマキシム・ド・ウインターの新夫人のように、新たにゴシックの館に入りこんだ彼女は、慄然とした肌寒い感覚とともに、「前の女」の匂いを嗅ぎ取るのが普通である。シルヴィアも当然、ヘスタの匂いを感じる筈である。ギャスケル自身も人間関係のゴシック構造には敏感であって、『妻たちと娘たち』などは全編、人間関係をめぐる複雑な感情の物語である。しかしシルヴィアはこの空間に満ちている敵意には気づかない。むしろ精神を病む母がそれを直感し「私を家に連れて帰って。こんな残酷な場所から出して！」(340)と叫ぶのだ。

新妻として古い家に乗り込むシルヴィアが、ヘスタに対して当然感じるはずの戦慄を感じないばかりか逆に姉妹のように信頼し、親密になるのは、一つには自然の中で愛されて育った彼女の、おおらかな性格のゆえであり、また、古家の主のような扱いにくい老女中をはじめ、眼に見える敵が多すぎたからであり、また、主として経済的理由から、好きでもない従兄フィリップとの結婚に追い込まれ、この店舗裏の住居に幽閉されているのだという、被害者意識が強く、夫に対しても家に対しても、愛も好奇心も抱きえぬ心理のゆえである。ギャスケルは

少しずつ、ヘスタもシルヴィアが好きになっていった。シルヴィアはフィリップの妻なのだから、ヘスタが本当に善良で信心深くなければ、ひどく

嫉妬していたことだろうが。(346)

と、ヘスタの善良さと信心深さが嫉妬の焰を抑えたように説明している。しかし一人の男をめぐる過去の女と新しい女、というゴシック的葛藤が生じない最大の理由は、フィリップに対してシルヴィアのセクシュアリティが開花しなかったところにある。フィリップがシルヴィアを見るまなざしは、彼女がまだごく幼い頃から、男性としてのセクシュアルな欲望を露骨に示したものだ。まだ12歳の彼女に男としての態度を示して怯えさせてしまった頃から、糸車を回す娘盛りの彼女の姿態を見る目、階段を上がる彼女のスカートの裾を見る目、いずれもシルヴィアに「いやらしい」と感じ取られている。他方同じ時期にキンレイドに対しては、彼が彼女の顔から目を離さないのを嬉しく思い、彼の前では紅茶をこぼしたり、裁縫箱を取り落としたり、冷静ではいられないこと、泣き濡れて腕に抱いてもらい、キスを受けるなど、セクシュアリティが開花する用意が十分であることを示している。フィリップもそれに気づいていただけに、やっと手に入れた恋女房が、セクシュアリティを抑え、夫に従順という家父長制イデオロギーの中に自己を埋没させた「ソドムのりんご」になってしまった現在を残念に思う。

しかもシルヴィアはフィリップがこのような不満を感じていることに気づかない。彼女はまず、フィリップの注文どおりに、町の生活に順応するのに忙しかった。精神を病む母の看護には最大のエネルギーを使った。だが、なによりも、彼女にはフィリップに対する興味がなかったのである。古城に捕えられた少女は普通、壁を調べたり、抜け穴を探したりして秘密の小部屋を発見し、禁忌の扉を開くのだが、シルヴィアは自分を捕えている空間にも、そこに住む魔物にも興味がなかった。フィリップの心の秘密の扉を開こうとはしなかった。それは甘えであり、安心であり、一種のみくびりであったかもしれない。しかし、もし彼が「ソドムのりんご」でなくて甘美に熟れた果実を求めているのだと分かっても、彼女にはどうすることもできなかつたろう。彼女はフィリップに対して開く花ではなかったのだ。もしこの二人の間に若い男女らしいセクシュアリティが溢れていたら、ヘスタにもセクシュアリティが開花する機会が訪れていたかもしれない。意思とモラルでは抑制できない、セクシュアリティが噴出するゴシック的葛藤が生まれたかもしれない。しかし主要人物3人のセクシュアリティは抑えられたま

ま、くすぶる状態である。そして「死んだ」とされて、しばらくの間、物語の表面に登場しないもう一人の主要人物キンレイドも、この時期、フランス軍に捕らえられるなどの冒険をしながら、シルヴィアの愛を信じて身を貞潔に守って「暖炉の中でまどろんでいる大きな石炭の塊」(85)の状態だったのである。

通常ゴシック小説は奇怪な古城や寺院など、日常性から離れた場所を舞台とするのであり、家庭はゴシックの城と対照的に日常的で平和な、幸福で安全な場所のはずである。しかし女性の日常を描くギヤスケルは、当時確固として形成されていた、外界の危険に対する平和な家庭という類型的設定を覆して「安全と調和の場である家庭は、一方その対極に危険と幽閉の場というゴシック的な城が表象する暗黒を不可避免的に内包して」(杉山ほか 30)いる事実を証明するのである。

3. 出産とセクシュアリティの噴出

かろうじて保たれてきた人間関係のバランスはシルヴィアの出産を期として崩れる。出産が女性の大厄であることは現在も変わらないが、生殖医学が未発達で衛生管理も不十分であった時代には、妊娠・出産は無計画に、一方的に女性の負担となる形で行われた。頻繁な妊娠と栄養不良が母体や胎児に負担を強い、嬰兒が危険にさらされる場合も多く、産婦が死亡する場合も、母子ともに命を落とす場合も多い。文学作品においては特に、出産時の生と死の対比が劇的に扱われ、20世紀においてもヘミングウェイは、第一次大戦を背景にした長編『武器よさらば』を、女主人公キャサリンの胎児もるとも出産死で終えて喪失の主題を際立たせ、フォークナーも『砂塵の中の旗』において、若いペアードの華麗な若妻キャロラインを胎児もるとも出産死させて、彼への絢爛たる死の誘いとしている。

死に至らぬまでも、産婦は産褥熱に冒されるなどして、肉体も精神もはかばかしく回復しない場合が多かった。出産は性のエネルギー、肉体のエネルギーが最高度に使用される場面であり、ホルモン分泌が黄体ホルモンから女性ホルモンへと急激に変化することもあって、抑鬱的に、いわゆるマタニティー・ブルーが発症することは今日よく知られている。女性を中心に描くことの多い女性作家は、前述の男性作家たちのように出産を劇的な死へとは進めず、むしろ出産が女性にもたらす変化と、それに伴うストーリーの展開へと筆を進める。『嵐が丘』のキャサリンは、出産を控えて高熱を発した後、理性の籠が外れて、抑えていた真の

恋人ヒースクリフへの思いがほとぼしる。

シルヴィアの場合も意識の深層に抑えこんでいたキンレイドへの思慕が、高熱による幻覚として不思議な幻影を出現させる。出産は無事に済み、かわいい女の赤ちゃんを中心にした家族の幸せが、絵のように美しく周囲の胸を打つ日々だったが、産後の回復が遅れた。午後になると熱が出、意識が朦朧となる状態が続いたある日、そっと病室をのぞいた夫のフィリップを見て、シルヴィアは叫ぶ。

「ああ、チャーリー、私のところへ来て、わたしのところに！」……「誰なの？ お願いだから、あなたが誰なのか教えて！」(354)

自分の子供を生んでくれたばかりの恋女房に「あなたは誰？」と訊かれては、夫たるもの、立つ瀬がないだろう。しかもシルヴィアは夢か現実か分からない状態で、まざまざとキンレイドの姿を見たのだ。彼は死んでなどいなかったのだ。ああ、私、どうしたらいいの、と彼女は悶え泣く。さすがのフィリップも言ってはならない言葉を口にしてしまう。

「キンレイドは死んだんだ、いいね、シルヴィー！ それにこんな風にほかの男のことを夢に見たり、奴のことをしゃべったりするなんて、君はこういう種類の女なんだ？ きみは、結婚していて、いまの男との間に子どもだってできているっていうのに」(354)

母のためにキンレイドへの恋を捨て、セクシュアリティに封印をして貞節で「従順な妻」であろうと努めているシルヴィアにとって「どういう種類の女なんだ。結婚していて、今の男との間に子どもだってできているっていうのに」という非難は耐え難い侮辱だった。彼女には自分がキンレイドのことを思っているという自覚がない。フロイトもユングも、深層心理の解明もない時代に、シルヴィアはまざまざと出現した幻影を現実かと怪しみ、むしろ無邪気に驚き怯えて、フィリップに相談をもちかけたのだ。

夢という現象については古来各民族によってさまざまな解釈がなされるのだが、近代科学が夢はそれを見る人の脳の海馬のあたりの記憶である、と解明する

のに対して、古代・中世には人の思いが強いとき、それは幻となって相手の夢のなかに出現する、という考えがあった。個人の脳神経の働きではなく、一種の超自然現象として夢や幻が実在すると考えたのである。現実の人間の生霊が肉体から抜け出して、思いの深い所に、同じ肉体の姿をとって出現するとも考えられた¹。

ギヤスケルは、理屈では説明できないが霊は存在するのだ、という感じ方を巧みに用いて、いくつかのゴシック小説を書いている。「乳母の物語」においては、古い貴族の屋敷に、冷遇されて死んだ息女と幼児の霊が棲みついでいて、訪れた幼女の前に出現する。「ブリジットの呪い」においては、美しく清らかなルーシーには背後霊のような幻影が憑いていて、彼女の意思とは無関係に、彼女そっくりの姿で出現して、邪悪な働きをする。邪悪な分身がいるというのは気のせいでは、と言ったとたんに語り手はルーシーの背後にもう一つの姿を見る。それは体つき、顔つき、衣服の微妙な手触りまでルーシーにそっくりなのに、灰色の目にはいやらしい悪魔の魂をのぞかせて、嘲笑と挑発を繰り返すのだ。老女ブリジットの呪いが、清純なルーシーにかかった、という謎解きだが、本人が全く知らぬうちに勝手に邪悪な分身が出現し、その姿が無関係な第三者にも見えるとなると、超自然の意志を問うしかない。『シルヴィアの恋人たち』においても、この場面でのキンレイドの幻影の出現は、シルヴィアの潜在意識というよりはむしろ、キンレイドが幻影という非合理かつ不条理な存在として出現し、たまたまそこに居合わせたフィリップの外形の内部に、実質として入り込んで、どちらか分からない朦朧としたものになっているように描かれて、読者を慄然とさせる。

キンレイドというオーラの高い存在は、これより前にフィリップの夢に現われて彼を悩ませていたのだ。実はフィリップは、キンレイドが強制徴兵隊に捕えられ、連行される場面に現実に居合わせ、彼のシルヴィアに対する誠実な愛の告白を聞き、それをシルヴィアに伝えると約束しながら、実行せず、逆にシルヴィアと結婚してしまったのだ。良心の呵責がキンレイドの夢を見させるのだとフィリップには分かっているのだが、近頃その夢を見なくなった、と思っていた矢先、シルヴィアの夢に出た、と聞いて、夢魔が自分から妻に移ったような不気味なショックを受けるのである。しかもその後キンレイドの幻影は、毎夜フィリップの夢に現われて実在感を増し、一夜ごとに接近して来て彼を脅かす。

キンレイドが強力なオーラを発するのは、彼がつねに死の翳りを伴っていたか

らである。物語の冒頭、北海一腕の立つ鋸打ち、仲間をかばって勇敢に戦った正義の男、という評判を背に、シルヴィアと読者の前に現われるキンレイドは、意外にも青ざめて弱々しく、友の肩にすがって、やっと立っているという風情だった。夕暮れの墓地、徴兵隊に殺された水夫を弔う葬式に、まだ死の気配を漂わせて現われた彼の姿は、純情なシルヴィアの心を動かす。本来の活力を取り戻すとともにシルヴィアとの愛を確かにした彼は、突然消息を絶ち、死んだという説が流布される。周囲が、シルヴィアにそう信じさせたのだ。船乗りという危険な職業のキンレイドよりは、町の洋品店員という安定した職業のフィリップをシルヴィアの結婚相手に、と望んだのだった。しかし海底に沈んでいるキンレイドの端正な顔はまっすぐ自分を見ている、漣立つ水面の下に彼の顔を見ることができはずだ、というシルヴィアの幻想、幽霊でもいい、もう一度、あの瞳を見たい、という彼女の願望はあまりにも強烈で、現実の彼の魅力を凌ぐほどである。

「もしも彼の明るく、きりっとした顔、あまりに頻繁に思い出そうとしたために、かえって記憶から薄れてきたあの顔をもう一度目にすることができたなら。もう一度、超自然の働きによって海底から身を起こし、波を越えて、あの踏み越し段のところ、わたしを待っていてくれたら。赤い夕日が彼の美しい目をきらきらさせているのを、一瞬でも見ることができたら。一瞬、彼を鮮やかにこの世にあるものとして見ることができたら、後は霧と化してしまっても構わない……どうかもう一度だけ彼に会わせてください、一瞬でいいから情熱的な喜びを味わわせてください……」(265-66)

強い霊力を持つキンレイドはフィリップとシルヴィア、二人の夢に現われ、シルヴィアには、何か大切な言葉を囁き続ける。シルヴィアの夢に引かれるかのように、実はキンレイドはフランスでの捕囚を脱してイギリスへ、シルヴィアのもとへと近づいていたのだ。モンクスヘイヴン沖で難破しかかった船を、たまたま通りかかったシルヴィアは漁村の人々と一緒にロープを引いて助けるのだが、その船上にキンレイドはいたのだった。翌日早朝、実家のあったヘイターズバンク農場にハーブを摘みに来たシルヴィアは、思いがけなく、死んだとばかり思っていたキンレイドと再会する。シルヴィアを思って操を守ってきたキンレイドは、

シルヴィアがフィリップの妻となっていることに愕然とするが、事情を知ると、君は裏切っていない。騙されたのだから。そんなのは本当の結婚ではない。互いの愛と誓いこそ真実だ。僕は二人で結婚の約束をしたときの、半分に割った6ペンス銀貨を肌身につけて守り通し、今もほら、持っているんだ。さあ、おいで、正々堂々と僕たちは結婚しよう、と熱烈に呼びかけ、彼女を引き寄せる。

「今までのことなんかどうでもいい。これからは僕たち、お互いに誠実でいよう。さあ、おいで、シルヴィア」(382)

遅しい肉体の魅力に溢れ、愛と条理に満ちたキンレイドの求愛だったが、死を透して見る幻影の強さに、生身の人間は勝てなかったのかもしれない。赤ん坊が泣いたときシルヴィアは現実に戻り、普通の主婦の感覚に戻った。キンレイドは去り、小説自体からゴシックの要素は消える。

4. 反ゴシック

ゴシック小説においては幽閉と同時に脱出も重要なテーマである。塔に閉じ込められた王女は、強烈な脱出願望に突き動かされて助けを求め、また、自力で抜け穴を発見して脱出を図る。そこから推理小説、心理小説への道が開かれるのであるが、『シルヴィアの恋人たち』の不可解さは、これまで母のために自己を幽閉する道を選びながらも心の奥深くで自由と脱出を求めてきたはずの女主人公シルヴィアが、この重要な場面で「女」であるよりも「母」であることを、冒険よりも良識を、放浪よりは安定を選び、幽閉の塔のなかにどっかと居座ってしまうことである。彼女はジェイン・エアやドリング・オークリー²のように荒野をさまよいはしない。これは彼女が男に裏切られるという切ない経験をしていないからだろう。夫フィリップは彼女を愛すればこそキンレイドを裏切り、結果として彼女の信頼を裏切ったのだが、男女の関係において彼女を裏切ったわけではない。恋人キンレイドは戦闘や捕囚の期間中、彼女を裏切ったことはないと明言し、いまなお「さあ、おいで」と呼びかけてくれる。裏切ったのは彼女のほうなのだ。すべてを捨てて恋を、セクシュアリティの噴出を、情念の充足を選ぶ代わりに、良識と母性愛を選び、世間のすなわち読者の常識と妥協してしまったシ

ルヴィアは、以後ヒロインとしての魅力を失う。不条理な状況に置かれていない、不条理な行動に出ないヒロインは、ゴシック・ロマネスク小説のヒロインにはなりえない。

まるでその代償であるかのように、夫フィリップが家を出る。登場人物にとっても、読者にとっても不可解なこの行動によって、幽閉された王女の代理として幽閉者であるゴシックの塔自体が解体し、漂流するという奇妙な捩じれが物語に出現するのである。『放浪者メルモス』『ケイレブ・ウィリアムズ』などに見るように、本来ゴシック小説の主人公は男性であり、男が捕えられ、幽閉され、家庭を失ったのちに脱出し、暖かい平和な家庭を夢見ながら逃亡を重ねる、というストーリーが主体であった。この伝統に従うときフィリップは何から脱出し、何を求めて荒野をさまよったのだろう。彼は暖かい家庭を求めて家を出た。妻シルヴィアの愛と優しさが彼の求めるものである。彼は自分がそれらを得る資格も権利も可能性もないことを改めて認識し、贖罪の目的で自己を追放したのである。だが、贖罪は、罪と恥の意識に追われながらムアをさまよってみても果たされるものではない。夕方、疲労と心労でへとへとになっているところを羊飼いの老人に発見され、パブに連れて行かれて、荒野の彷徨は半日のミニ版として終わった。しかしパブで新兵を徴募に来ていた下士官に捕まり、親切ごかしの罠にはまって、フィリップの新生がここから、自分の意思で始まることになる。新生の第一歩として彼はフィリップ・ヘップバーンという名を捨て、スティーブン・フリーマンという名を選んだ。「新しい名前で、新しい人生を歩み始めたのだ。ああ！ 過去は決して消えることはないのに！」(392)と、例によって作者ギヤスケルは運命の女神のようなコメントを発するのであるが。

フリーマン、自由な人、という名を新しい自己の名として選んだフィリップの心情は哀れである。幽閉の塔であったはずの彼自身もまた、周囲の思惑や慣習という孤塔に閉じ込められていたのだ。さらに夫婦という人間関係において、一方が不当に幽閉されていると感じる場合、幽閉していると思われる側も実は閉塞状態にあって、孤立と疎外を感じているのである。フィリップの側から見るとときシルヴィアは彼を拒む閉ざした塔であって、母親と赤ん坊という肉のつながりのある女たちは自己内部に立ち入らせるのだが、フィリップが入ることは許さなかった。彼女の寝室で母親ベル、赤ん坊ベラの三人が楽しげにさざめくのを、彼はド

アの外で羨ましく立ち聞きする。家にあっても、すでに彼は追放者だったのだ。

5. 日陰の父 センティメンタル・ノヴェル

鏡や映像はゴシック・ロマネスク芸術の重要な小道具である。ゴシック小説においては多感な主人公が現実の自己より美しい映像を鏡の中に見、魅惑されて虚の世界に引き込まれていく、あるいは自己の分身を見ることから自己分裂へと進むという設定が多いのだが、『シルヴィアの恋人たち』において鏡を見るのはフィリップとヘスタという、ロマンティック・ヒーローではない、むしろ反ゴシックの人物たちである。

フォスター洋品店には小さな鏡があり、ストーリーの最初の段階でヘスタは窓の外にかわいらしいシルヴィアと、そこへ向かって走って行くフィリップの姿を認め、鏡に自分の暗い顔を映して比べる。ヘスタは鏡によって自分の容色が劣っていることを認識する。その認識は彼女に、フィリップへの空しい愛を諦めるといった理性的な行為を促す。彼女は現実をはっきり認識する手段として鏡を使っている点で、「鏡の中に現実を見ない」ロマン派と態度を異にする³。さらにフレンド派らしく、強く内省を促す教訓的契機として用いている。

家を出る前にフィリップは、この同じ鏡に自分の悲しげな青白い顔を見、キンレイドのきりっとした軍服姿を思い出し、比較してみて絶望する。フィリップも現実を認識する手段として鏡を使い、記憶の中のライヴァルと比較して自己嫌悪に陥るのだが、彼は内省というよりは自己に関するマイナスの幻想を増幅する道具として鏡像を使っている。キンレイド、シルヴィア、という美男美女の主人公たちが鏡を見ず、ことに美人と評判の高いシルヴィアが容姿を誉めそやされるのを嫌うのに対して、フィリップとヘスタは容姿を気にする。とりわけフィリップはつねにキンレイドと自分の容姿を思い比べては、絶望する。赤い軍服姿の下士官の言うままに兵士になろうと決めたのも、もし自分が快活で、機敏で、立派な軍服に身を包んでモンクスヘイヴンに凱旋したら、シルヴィアは自分を愛してくれるのではないか、という幻想を抱いたからだった。その背後に彼はキンレイドの魅力的な軍服姿を見ていたに違いない。実はそのように外形や容姿ばかりを問題にするフィリップの態度に、シルヴィアは嫌悪感を抱き続けていたのだが。

次に彼が自分の姿を鏡で見たとき、事態は全く絶望的だった。彼は海兵隊に入

隊して順調に兵士としての職務を果たしている最中に、他の兵士が軍艦上で起こした爆発事故によって負傷し、全身ことに顔面に火傷を負い、顎骨が砕けて歯がむき出しになるという悲惨な容貌になったのだ。

両眼は以前と変わらないままで、顔の中で一番いいところと見られていたが、その眼窩は深く窪み、うつろで、陰険な感じを与えた。彼の顔の下半分といえば、黒ずみ、皮膚が引きつり、歯はむき出しで、顎骨が砕けたせいで輪郭は完全に変わってしまっていた。そんな姿でシルヴィアが拒んだ愛を取り戻しに行こうなどと考えるならば、彼は本当の愚か者だ。モンクスハイヴンに戻るのならば、世捨て人として、乞食として戻らなければならない。(466-467)

フィリップはこのとき鏡の上に悲惨な自画像を見ていたのだが、同時に修道院で読んだ聖者物語の、悲しい愛と和解のロマンスを二重写しに見ていたのだった。

長い孤独な旅を続けたフィリップは家郷に帰り着いたその夜、シルヴィアと娘ベラの姿を見てショックを受ける。どんなに嘆いているだろうと想像していたのに、二人は幸福そうだったのだ。彼は自分が居なくても、いや、むしろ居ないからこそ二人は幸福なのだ、と苦い思いを噛みしめる。彼は名乗り出ず、流浪もせず、町外れの粗末な小屋に泊まって、それとなく二人を見守り、夜になると懐かしい家の辺りを徘徊した。『フランケンシュタイン博士の怪物』『ノートルダムのせむし男』『オペラ座の怪人』など、ゴシック小説には奇怪な容貌の怪人がヒロインを愛し、付きまとって恐怖させる筋立てが多い。しかしフィリップは悲惨な容貌に変わっているが、恐怖を与えるのではなく、むしろ可哀想にという憐憫の情を催させる程度のものであって、ホラーに進む可能性はない。しかも彼は付きまとっているのだが、むしろ人目を避けるような付きまとい方である。シルヴィアは何度かその小屋を訪れて　　というも小屋の持ち主は、もと実家の農園で働いていたケスタの妹だったから　　惨めな浮浪者の存在を知ってはいたのだが、フィリップだ、と感じることはなかった。一度、町へ通じる道で、追い越さず、ベラに銀貨を入れたケーキを手渡させたことがある。初めて自分の娘の声を聞き、それが「かわいそうなおじちゃん」に対するものであったことから、フ

フィリップは万感胸に迫って、熱い涙をディー川に注ぐのである。いずれも挿絵画家デュ・モーリエやマーガレット・ウィールが逃がさず捕えて絵にしている、若い女性読者の紅涙を絞る感傷的な場面である。

女性を縛る道徳律が厳しく、しかも女性の地位が低く、自立して生活できる収入を得る道がなかった時代には、女性は男性中心社会の道徳律のもとに、男性に隷属して暮らす以外に生活の手段がなかった。抵抗できない形で婚外子を出産してしまった女性に対する社会の批判は特に厳しく、子供ごと男に捨てられる、あるいは子供は正規の家庭に引き取られるが、実母は名乗り出ることを許されないケースも多かった。そのような「日陰の母」を扱って読者の涙を誘う物語や演劇、いわゆる「涙の母」「瞼の母」ものはギャスケルにもあり、また洋の東西を問わず無数に存在する。

逆に何らかの形で実の父が家庭の外部に存在するのだが、名乗り出ることを許されないという「日陰の父」の物語は、家父長制社会においては、危険である。「日陰の父」は「日陰の母」に比べて、制度にとっても、本人にとっても危険であり、成功すればお家騒動が成立し、失敗すれば口封じに殺害されるという確率が高い。だが、戦争や革命などの社会変動の時期に必ず出現する物語ではある。さらに、社会の大変動がなくても、『嵐が丘』のヒースクリップの父親は誰か、『ジェイン・エア』においてロチェスターの館で養われている幼女アデルは本当に、説明どおりに、ロチェスターの友人の子であって、彼とは無関係なのか、という裏の物語がひそかに形成される。

フィリップは名乗り出ても何の支障もないのだが、歓迎されないだろうという気後れが、彼を「日陰の父」に甘んじさせる。一ヶ月余りゆるやかなストーキングをしていた彼は、海に落ちたベラを救って、いわば二度娘に生を与えながら、ついに父と認識されることなく世を去る。ロマンスの若い主人公にとって、父性とはかなり曖昧な、むしろ性的能力を暗示するのが主目的のものなのだろう。父を知らずに育ったベラには、社会的に父親の役割を果たしてくれたジェレマイア・フォスターの莫大な遺産が与えられ、彼の遠縁のものと結婚してアメリカに渡ったのだという。フィリップを記念するものとして残るのはヘスタが彼を記念して建てた、体の不自由な水夫や兵士のための救貧院であり、シルヴィアを記念するものは、この物語である。

注

本稿は2003年10月5日実践女子大学で開催された日本ギaskell協会第15回大会において筆者が行った講演「*Sylvia's Lovers* 北のゴシック」に大幅に加筆したものである。

1. 平安初期の小野小町の歌参照。古今和歌集巻12・恋552、553。
思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば醒めざらましを
うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものを頼みそめてき
2. Ellen Glasgow. *Barren Ground*のヒロイン Dorinda Oakley. 恋人に裏切られたドリндаは雨の荒野を七転八倒する。
3. “The 19th Century dislike of Realism is the rage of Caliban seeing his own face in a glass.”
“The 19th Century dislike of Romanticism is the rage of Caliban not seeing his own face in a glass.” Oscar Wilde, Preface to *The Picture of Dorian Gray*

引用文献

- Gaskell, Elizabeth. *Sylvia's Lovers* (Ed. with an Introduction and Notes by A. Sanders)
Oxford: Oxford UP, World's Classics, 1999. (鈴江璋子訳『シルヴィアの恋人たち』
ギaskell全集第5巻、大阪教育図書、2003).
- ワイリー・サイファー『ルネサンス様式の四段階』河村錠一郎訳、河出書房新社、
1976. Sypher, Wylie. *Four Stages of Renaissance Style*. NY: Doubleday, 1955.
- 杉山洋子ほか『古典ゴシック小説を読む』英宝社、2000。引用は同書中比名和子による書評 (Ellis, Kate Ferguson. *The Contested Castle: Gothic Novels and the Subversion of Domestic Ideology*. Urbana: U of Illinois P, 1989).